

比田井洵研究

——比田井洵編著『アルテ・フルート教則本』出版について——

A study on Makoto Hidai :

About the publication of *Altès Flute Method* written and edited by Makoto Hidai

丹 下 聡 子

TANGE Satoko

Makoto Hidai (1916 - 1989) established Japan Flute Club and endeavored for the wide spread of the modern style in the postwar era in Japan.

His *Altès Flute Method*, which has three volumes, is the first full-fledged textbook for flute performers and has been widely used for a long time in this country.

This method is mainly based on *Méthode pour flûte système Boehm contenant la théorie complète de la musique* by Henry Altès (1826 - 1895). Hidai, however, wrote some (original) preliminary practice pieces for each etude with practical advice to solve some performance problems. We discovered some parts are from F. Caratgé's revised version in 1956.

The research also discovered that Hidai also wrote commentary for flute fanciers based on his experience as a flute teacher according to the bulletins of *Japan Flute Club*. There is Hidai's evaluation criterion for the choice of instruments, a posture for flute performers, and an original training menu for self-trainers.

Thus, *Altès Flute Method* is not only a translation of the French textbook but an original educational project in Japan with Hidai's huge ingenuity which is properly suited to the era.

0. はじめに

ひだ いまこと
比田井洵（1916 - 1989）は、1947（昭和 22）年に発足した「日本フルートクラブ」を主宰し、戦後の日本におけるフルート音楽・奏法受容のために尽力した人物である。フルート教師としても活躍し、日本初の本格的な教則本として、『アルテ・フルート教則本¹（全 3 巻）』出版したことで知られている。この教則本の原書は、アンリ・アルテス Henry Altès²（1826 - 1895）の『音楽の完全な理論を含むベーム・システム・フルートのための教本（全 3 巻）*Méthode pour flûte système Boehm contenant la théorie complète de la musique*』である。

本論の目的は、比田井洵編著『アルテ・フルート教則本（全 3 巻）』が 1960（昭和 35）年に出版されるまでの経緯について明らかにすることである。この教則本は現在も版を重ねており、日本

国内で広く使用されている³。これは単なる翻訳本ではなく、比田井が編集し、解説を付け加えたものだが、彼が原書をそのまま日本語に翻訳するだけでなく、編集して出版した理由は明らかにされていない。

本論では、比田井が主宰していた「日本フルートクラブ」の1947年～1961年11月までの月報を研究対象とし、まず、比田井自身のフルートに関する経歴と「日本フルートクラブ」について概観し、月報の記事から比田井版『アルテ・フルート教則本』が出版される1960（昭和35）年までに日本で知られていた教則本について調査した。ここでは、日本語、外国語の教則本について調べ、月報に日本語訳が掲載された教則本についても述べた。日本語の教則本の中には、比田井の出版以前にアルテスの教則本が日本語訳されていると窺える記事が掲載されていたが、完全な翻訳本ではなかったことがわかった。これらと同時に、月報に比田井が書いた記事を精査することで、彼が教則本を執筆した理由を考察する。

最後に比田井が使用した編集のための元本について述べ、元本と比田井版の相違点を見て行くことで比田井の独創性を浮き彫りにし、比田井が国内で初めての本格的なフルート教則本と言われる比田井版『アルテ・フルート教則本』を出版するに至った経緯を明らかにする。

1. 比田井洵と日本フルートクラブ

1.1. 比田井洵（1916-1989）⁴

比田井がフルートを始めたのは昭和17（1942）年、彼が26歳の時であった。「思わぬ金が入ったので何か一生自分の身につけて居る様なものを買度い（ママ）」と考えた。フルートを購入することにしたのは、以前からモーツァルトの協奏曲やバッハのソナタでフルートの音に彼自身が「はげしい愛着」を持っていたという理由からである。このようにフルートの音は知っていたものの、彼はそれがどのようなものなのかは知らなかった。フルートの手ほどきを受けるべく、当時日本で活躍していた岡村雅雄⁵を訪ねた時に初めて本物のフルートを目にし、「金物の横笛かとイメージを壊されたような気がした」と述べている。比田井はフルートのことを黒い縦に吹くオーボエのような楽器だと思っていたようだ。

その頃の比田井は、会社員として出版社に勤務していた。それにもかかわらず一日のうち7時間をフルートの練習に充てていたという。その時間の内訳は、朝4時に起床し、朝食を済ませたあと4時50分から出勤までの8時と昼休みの30分、帰宅後は10時に寝るまで3時間半であった。本人の手記には「日響の定期以外映画もみない、お茶ものまない、酒も飲まないの四年間は全くよそから見たらフルートの鬼と云うものだつたろう（ママ）」と書かれている。しかしながら、彼はプロのフルート奏者になるつもりはなく自分自身の楽しみと喜びのために吹いていた。

比田井は手記の中で次のように述べている。「唯ガムシャラに吹いていただけで今考えてみると、もつと合理的な勉強法があつた事に気付く。多分あの半分以下で今の私以上の技術を身につける事は容易であろう（ママ）」。

この手記の書かれた5年後に『アルテ・フルート教則本』を出版する

ことになるのだが、このような経験が教則本の出版に活かされたのは間違いない。次に、比田井が主宰した「日本フルートクラブ」について見て行きたい。

1.2. 「日本フルートクラブ」

「日本フルートクラブ」は 1947（昭和 22）年に比田井のフルートの師であった岡村雅雄を会長に約 30 名の会員が集まって発足した。一番古い月報は 1949（昭和 24）年のものでその中には作曲家の平尾貴四男⁶やフルート奏者の吉田雅夫⁷の名前もある。その後、一旦解散するが 1951（昭和 26）年 8 月に比田井が主宰して再発足したのである。比田井が編集者となって 1951 年 9 月から月報を発行するとともに楽譜の配本⁸も行っていた。つまり、会員には月に一度、月報とともに楽譜が一冊届けられていたのである。そしてこの楽譜の配本というのが主な業務内容であった。これは、比田井が出版社に勤務していたことが功を奏したのではないだろうか。その配本の内容は高価な外国の楽譜であり、練習曲や小品などバラエティに富んだものであった。月報の内容も充実しており、当時の日本ではまだ知られていない楽譜・文献の紹介のみならず翻訳の掲載も含まれていた。たとえば、岡村雅雄の翻訳による T. ベーム『ボエム式フルートと其の演奏』⁹などは、現在も日本語訳が出版されていない貴重なものである¹⁰。そのほか、会員からの奏法や楽器に関する質問について比田井が丁寧に答えている。月報を頼りに独学でフルートを学んでいた愛好家たちから大いに期待されたものであった。

このようなことから、比田井は、独学でフルートを習得しようとしている人たちに丁寧な解説がついた教則本の必要性を感じていたのである。では、この頃の日本国内ではどのような教則本が知られていたのだろうか。次項では比田井版『アルテ・フルート教則本』が出版される 1960（昭和 35）年頃までに「日本フルートクラブ」の月報で紹介された教則本について述べる。

2. 1960（昭和 35）年頃までに月報で紹介された教則本

筆者は先の研究（丹下 2015）で大正時代から昭和 30 年までに国内で出版され、国会図書館に所蔵されているものを対象とした音楽書について述べたが、フルート教則本について言及することはできなかった。本研究で「日本フルートクラブ」月報を精査したところ、昭和 30 年代には多くの教則本が紹介されていることがわかった。ここでは、月報に掲載されているものの中から日本語版、外国語版、日本語訳の 3 つに分けて述べる

2.1. 日本語版

日本語で書かれた教則本は 4 冊あった。（表 1）は日本語版の教則本の一覧表である。発刊年が不明なものもあるため、月報に記載されていた年月順とした。

・吉田雅夫『フルート教本』

発刊年、出版社は不明だが、1956（昭和 31）年に全音楽譜出版社から出版されたものと同じだと考えられる。

・山田忠男¹¹『アルテ教則本 巻 1』

1952（昭和 27）年に三和書房より発刊されているが非売品である¹²。アルテスの教本から練習曲を抜粋して書かれたものであり、フランスから原書を直接輸入すると 6～7 千円と当時としてはかなり高額だったため非常に喜ばれた¹³。「150 円」という価格はクラブ会員向けのものであった。

・森敏信¹⁴『教則本』

「交換売買希望」欄に記載されていたこの教則本は原書が見当たらず、詳しい内容は不明であるが、オーケラウロ協会で稽古に使われていた教則本でもあることがわかった¹⁵。

・岡村雅雄『フルートの学習書』

1958（昭和 33）年に出版されたこの教則本は岡村が師から学んだことやフルート奏者としての体験によって書かれているが、アルテスやタファネル¹⁶とゴーベール¹⁷などの教則本を参考にしていることも述べられている。

（表 1）日本語版教則本一覧

月報への 記載年月		著者	題名	備考	価格 (円)
年	月				
1951	9	吉田雅夫	フルート教本	発刊年不明だが、1956 年に全音楽譜出版社から出版されたものと同じだと考えられる。	300
1952	5	山田忠雄	アルテ教則本 巻 1	フランスから輸入すると高価なため、非常に喜ばれている。	150
	6	森敏信	教則本	交換売買希望欄に記載。	不明
1958	12	岡村雅雄	フルートの学習書	1958 年（昭和 33 年）発刊。	400

2.2. 外国語版

（表 2）は外国語で書かれている教則本の一覧である。月報への記載順とした。複数回紹介された教則本もあったが、ここでは各教則本が最初に記載された年月のみとした¹⁸。1951（昭和 26）年 9 月第 1 号から 1960（昭和 35）年 2・3 月合併号を対象として日本フルートクラブ月報とともに会員に「配本」されたもの、月報の中の「カタログ」に記載されていたもの、その他の教則本の 3 つに分けて述べる。

・配本

配本としてフルートクラブの会員に配られた教則本は 16 冊あった。著者ごとに見て行く。

(表 2) 外国語版教則本一覧

月報への 記載年月		著者	題名	備考	価格 (円)
年	月				
1951	9	E.Köhler	練習曲 1 (作品番号不明)	配本	*
1951	11	E.Köhler	練習曲 2 (作品番号不明)	配本	*
1952	1	E.Köhler	練習曲 3 (作品番号不明)	配本	*
	7	P.Taffanel=P.Gaubert	デイリーエクササイズ 1-10	配本	*
	8	P.Taffanel=P.Gaubert	デイリーエクササイズ 11-17	配本	*
		O.Langey	Practical Tutor	Boosey&Howkes Catalogue	612
	9	H. Altès	Famous Flute Method in 3 Parts	輸入楽譜のカatalogに記載あり (英文)	各 1,530
		J.Andersen	24 Etude Artistiques op.15		765
			24 Progressive Studies op.33		459
			24 Virtuosity Studies op.60		1,224
		M.Moyse	Debutant Flutist		459
			24 Little Melodious Studies with Variations		459
			25 Melodious Studies with Variations		612
			100 Studies from CRAMER in 2vols		各 459
			50 Studies from DEMERSSEMAN in 2vols		459 / 612
			24 Daily Exercises from Soussmann		765
			From BERBIGUIER : 18 Studies		459
			From BERBIGUIER : Characteristic		689
			From FURSTENAU : 26 Studies		459
			From FURSTENAU : 6Grand Stuiies		689
			10 Studies from WIENIAWSKI		612
			10 Studies from KESSLER		612
			Articuration School : Mechanism — Chromatism		各 765
1953	5	M.Moyse	ソノリテ	青写真にて複写	280
	12	T.Berbiguiier	18 の練習曲	配本	*
		E.Köhler	ロマンティック・エチュード	配本の原稿として借りたい旨掲載。その後 1958.7-8 の配本となる。	*
		G.Briccialdi	op.31-11.12.13	製本あり	200
1954	1	H. Altès	フルート教則本	「2 巻求む」(読者)	*
	6～9	L.Lorenzo	教則本	配本	*
1955	8	P.Taffanel=P.Gaubert	24 の漸新的練習曲	配本	*
1956	5	G.Gariboldi	Exercices Journaliers op.89	配本 (会報には作品番号のみ記載されていた)	*
	10	A.B.Fürstenau	12 の練習曲	配本	*
	12	J.Andersen	24 の名人の為の練習曲 op.60	配本	*
1957	5	J.Donjon	演奏会用練習曲	青写真にて複写 (人気があったため 1959.3 に配本した)	160
		H.Genlzmer	練習曲	配本	*
	9	G.Gariboldi	20 の小練習曲 op.132	配本	*
	12	J.Andersen	18 の練習曲	配本	*
1958	5	J.Andersen	24 の練習曲 op.21	配本	*
1959	4	A.Brooke	フルート教則本 (全)	アメリカで一番有名な教本。米軍の放出で 40 冊入荷→数日で売り切れた。	450 (定 1,280)
	7,8	H.Soussmann	24 の練習曲	配本 (W.Popp の注意書きの和訳を掲載)	*

エルネスト・ケーラー Ernesto Köhler (1849 - 1907)

第 1 回の配本であったケーラーの練習曲には作品番号が記さていなかったが、作品 33 のことである¹⁹。また、ケーラーの練習曲は『ロマンティック・エチュード』も配本されている。これは 1953 (昭和 28) 年 12 月に配本の原稿として借りたいという記事が掲載されており、この原書

がどのように借りられたのかは月報から読み取ることはできなかったが、配本は 1958（昭和 33）年に実現している。

ポール・タファネルとフィリップ・ゴーベール

1951（昭和 26）年 7 月と 8 月の配本は、現在も「タファネル・ゴーベール」と呼ばれて使用されている『デイリー・エクササイズ』である。この原書は 1923 年にフランスで出版された『フルートの完全な教本 *Méthode complète de flûte*』²⁰ の一部分である。また、1955（昭和 40）年 8 月の『24 の漸進的練習曲』もその一部である。

トランキル・ベルビギエ Tranquille Berbiguier (1782 - 1835)

1953（昭和 28）年 12 月の配本は、ベルビギエの『18 の練習曲』であった。

ジュゼッペ・ガリボルディ Giuseppe Gariboldi (1833 - 1905)

『フルートの為の毎日の練習曲』は 1956（昭和 31）年 5 月に、『20 の小練習曲』は 1957（昭和 32）年 9 月に配本されている。

ハラルド・ゲンツマー Harald Genzmer (1909 - 2007)

1957（昭和 32）年 5 月にはゲンツマーの『練習曲』を取り上げているが、月報には「何分近代人の為はつきりしたことは全然解つて居ません（ママ）」と述べられている。ゲンツマーはドイツの現代作曲家であり、「比較的新たらしい形式の勉強の為（ママ）」とも述べられていることから、古いものばかりではなく新しいものも積極的に紹介しようとしていたことが窺える。

アントン・ベルンハルト・フルステナウ Anton Bernhard Fürstenau (1792 - 1852)

1957（昭和 32）年 10 月に配本されているのはフルステナウの 12 の練習曲²¹である。比田井は練習曲には作曲家ごとに特有の節があるため、どんな曲にも対応するために多くの人の練習曲をこなすことを勧めており、この練習曲は演奏のために非常に役立つと述べている。

カール・ヨアヒム・アンデルセン Karl Joachim Andersen (1847 - 1909)

アンデルセンの練習曲は 2 冊で『18 の練習曲 (op.41)』²²が 1957（昭和 32）年 12 月、翌年 5 月に『24 の練習曲 op.21』が配本されている。

ハインリッヒ・ススマン Heinrich Soussmann (1796 - 1848)

1959（昭和 34）年 7・8 月合併号ではススマンの『24 の練習曲』が配本された。月報の中でこの教本は、ススマン著『フルート教則本（全 3 巻）』の 3 巻のために書かれたものであると述べられている。

・カタログ

輸入楽譜のカタログは 1952（昭和 27）年 8 月と 9 月に掲載されていた。この頃、フルートクラブと松尾ミュージックカンパニーとで輸入楽譜の取次に関する契約が成立したためである²³。

オットー・ランゲイ Otto Langey (1851 -1922)

ランゲイの *Practical Tutor* は比田井がフルートを教える時によく使っていた教材である²⁴。8 月号のカタログに記載されていた。

以下は 9 月号に記載されていたものである。

アンリ・アルテス

アルテスの *Famous Flute Method in 3 Parts* が記載されている。これは本研究でとりあげている教本と同じものだが、フランス語原書ではなく英語訳されたものだと考えられる。また、1954（昭和 29）年 1 月に「2 巻求む」という読者からの声が掲載された。

カール・ヨアヒム・アンデルセン

アンデルセンの練習曲は *24 Etude Artistiques op.15*, *24 Progressive Studies op.33*, *24 Virtuosity Studies op.60* の 3 冊が掲載されていた。これらは配本で取り上げられているものではない。

マルセル・モイーズ Marcel Moyse (1889 - 1984)

モイーズの教則本は 13 冊が掲載されていた。モイーズ自身が書いたものと他の著者のものを監修しているものがある。その内前者は *Debutant Flutist*, *24 Little Melodious Studies with Variations*, *25 Melodious Studies with Variations*, *Articuration School : Mechanism - Chromatism* の 4 冊である。後者は以下の 9 冊である。*100 Studies from CRAMER in 2vols*, *50 Studies from DEMERSSEMAN in 2vols*, *24 Daily Exercises from Soussmann*, *From BERBIGUIER : 18 Studies*²⁵, *From BERBIGUIER : Characteristic*, *From FURSTENAU : 26 Studies*, *From FURSTENAU : 6 Grand Studies*, *10 Studies from WIENIAWSKI*, *10 Studies from KESSLER*。

・その他

ここでは複写して販売していたものと広告として掲載されたものを見て行く。複写して販売されていたのは、モイーズの『ソノリテ』（1953〈昭和 28〉年 5 月）、ブリッチャルディ²⁶の『フルート独奏の為の練習曲 op.31-11,12,13』（同年 12 月）、ドンジョン²⁷の『演奏会用練習曲』（1957〈昭和 32〉年 5 月）であった。中でもドンジョンの練習曲は人気が高かったため、後に配本として取り上げている²⁸。また、1959（昭和 34）年に広告として掲載されたのはブルーク²⁹の『フルート教則本』である。この教則本はアメリカで一番有名な教則本であることが紹介されており、米軍の

放出で 40 冊入荷したという広告が掲載された。翌月の月報には数日で売り切れたことが報告されている。

2.3. 月報に日本語訳が掲載されているもの

月報には外国語で書かれた教則本の日本語訳の連載もあった。(表 3) は日本語訳された教則本の一覧である。モイーズの『ソノリテ』は 1953 (昭和 28) 年 5 月に複写を販売しているにもかかわらず、6 月～8 月に日本語訳を掲載している。6 月号の編集後記に楽譜を持っていない人のために引用楽譜を入れるようにしたと書かれており、できるだけ多くの会員にこの本を知ってもらいたかったということがわかる。また、フランス語で書かれた原書を購入した会員から翻訳の要望があったということも考えられる。

1953 (昭和 28) 年 10 月と 12 月に掲載されたシュヴェートラー³⁰の著書の翻訳は、山田忠男から寄稿されたものであった。山田は 1 回目に「歌口とその形に就いて」を寄稿した際に、もし会員からの希望があれば他の項も翻訳する旨を伝えている。また、同号に比田井による「マウスピース私考」と題されたシュヴェートラーの記事に対する考察が述べられている。このように、外国の出版物の翻訳を掲載し紹介するだけでなく、疑問点を明らかにし、議論の対象としていたことは興味深い。2 回目が 12 月に掲載されているため、会員からの要望があったのであろう。

1954 (昭和 29) 年 2 月から 3 か月間掲載されたタファネルとゴーバールの教則本の越川敏子による翻訳は、姿勢や音、呼吸法などに関する項目で比田井も「非常に為になる部分がある」と述べている。同年の 3 月から 3 か月掲載されたのは宇野浩二の訳によるチャップマン³¹の『フルート・テクニク』であった。

(表 3) 日本語訳された教則本

月報への記載年月		著者	題名	備考
年	月			
1953	7～8	M.Moyse	ソノリテ	斉藤格訳
	10	M.Schwedler	「歌口とその形に就いて」	山田忠男訳
	12	M.Schwedler	「フルーティストのための指の体操」	山田忠男訳
1954	1	P.Taffanel=P.Gaubert	教則本	越川敏子訳
	3	P.Taffanel=P.Gaubert	教則本	越川敏子訳
	4	P.Taffanel=P.Gaubert	教則本	越川敏子訳
	4～9	F.B.Chapman	フルート・テクニク	宇野浩二訳

昭和 35 (1960) 年ごろまでに日本で出版されたフルートのための教則本は数冊しかなかったが、「日本フルートクラブ」では多くの教則本が紹介されていたことがわかった。そのほとんどが「練習曲」であったが、中には基礎的なこと（楽典、楽器の構え方、音の出し方）から丁寧に解説している教則本もあり、比田井自身のレッスンでよく使用していたランゲイの教則本もそのようなものであった。しかし、彼はこの教則本を全面的に支持していたわけではなく、良い教則本を探していた。この頃比田井は、アルテスの『フルート教本』が世界中でもよく使われていることを知っており、本当は生徒にもこれを勧めたかったようだが、高額なためにすすめかねたと述べている³²。そ

こで、この教本をもとにして日本版の教則本を出版しようと思いついたのである。

月報では、教則本を紹介するだけにとどまらず、翻訳したものを掲載したり、それについて解説したりしていることから、比田井が日本語で本格的な教則本を出版する必要があると考えていたことがわかる。それはすなわち、それまでに出版されていた入門書のような日本語版ではなく、初心者から上級者まで使える教則本であった。

次項では、比田井版『アルテ・フルート教則本』執筆のための元本について述べ、その元本と比田井版の違いを見ることで比田井版の独創性を見出したい。

3. 比田井版に見られる独創性

3.1. 比田井版『アルテ・フルート教則本』執筆のための元本について

比田井が入手していたアルテスの教則本は以下の2種類であった。

① *Célèbre Méthode Complète*. (vol.1,2) Révisé par F. Caratgé. Paris: Alphonse Leduc.1956.

② *Célèbre Méthode de flûte*. Par H. Altès. 22eme édition. Paris: Alphonse Leduc. 1956.

これらは、現在も「日本フルートクラブ出版³³」に保管されている。①は、1956年にLeducから出版されているものでカラジェ³⁴によって改訂されたものである。4か国語（仏・英・独・西）で書かれており、全2巻である。②は、同じく1956年に出版されている。こちらはフランス語で書かれており、改訂者の名前はないため1880年にMillereauから出版された原書をLeducが出版したものだと考えられる。比田井の長男である比田井裕³⁵氏によると、これらの本の入手先などは不明で、購入したのではなく知人から譲ってもらったものもあるという。したがって、比田井がいつ、どのような経緯でこれらの教則本を手に入れたのかはわからなかった。『アルテ・フルート教則本』出版時の月報に書かれた比田井の手記には「Caratgéという人が改編したもの」と述べられているので、元本として参照したのは①の教則本であると言える³⁶。また、比田井版の出版にあたり、Leducとのやりとりがあったという話もあったが、その証拠となる書類は残されていない。

比田井版は、元本を単に翻訳したものではなく、彼のフルート教師としての経験と「日本フルートクラブ」に掲載した外国の文献などから得た知識をもとに編集し、解説を加えたものである。また、カラジェ版を元本としていたということは、1880年にフランスで出版されたアルテスの原書とは全く同じではないということも明らかになった。

次に実例を示し、比田井版の独創性を見て行く。

3.2. 実例

・「まえがき（前書き）」について

比田井は、前書きの「この本で勉強されるかたに」で次のように述べている。

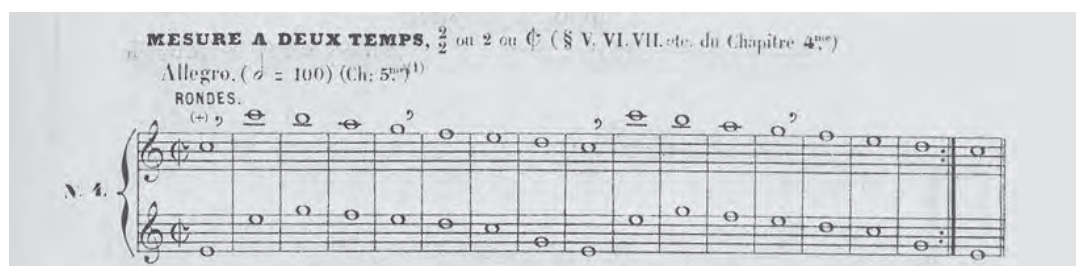
「各課の初めに、その課に必要な基本の練習を入れ、わかりやすい解説をつけて地方の初心者にも完全に理解できるように努力した。」

ほとんどが二重奏で書かれているため独習のための本ではないと述べているが、フルート教師がいなくてもヴァイオリンやピアノの教師とも勉強できると述べている。細かな解説³⁷は、フルート教師に習うことができない人たちのために書かれたものであった。

・基本の練習

まず初めの練習曲の前にアルテスの原書では二重奏によるハ長調の音階練習がある（譜例 1）。

（譜例 1）二重奏によるハ長調の音階練習（Altès1880：22）



しかし、カラジェ版と比田井版にも同じ予備練習があるものの、二重奏では書かれていない。このことからカラジェ版を参考にしたことがわかる。そして、カラジェ版と比田井版には、この音階練習以外にも短い予備練習がある。非常によく似た練習曲だが、全く同じではない。ここでは比田井版のみ参照する（譜例 2）。

（譜例 2）予備練習 1（比田井 1960：22）

「左手人さし指（中略）動かさないこと」は、カラジェ版からの翻訳である。その前後に書かれている小さな文字が比田井によってつけられた解説である。比田井は「最初に低オクターブを練習すると高オクターブが出にくくなるから、中オクターブを完全に練習するのがよい」と述べている。これは、フルートの 3 オクターブの音域のうち、どこから練習すれば良いかを解説している。そのほかに、中音域の E について「この E の音は中音のうちで最も出しにくい。唇を締めすぎると

中音のHが鳴ってしまい、ゆるめ過ぎるとオクターブ下がってしまうから、何度も繰り返して唇の締め方を覚えることが大切である」という解説もあり、まだ楽器の特徴を知らない初心者にも音が出にくいことを伝え、練習の方法を解説している。

比田井版の『アルテ・フルート教則本』には、カラジェ版の翻訳とともに、この教則本を使って勉強する生徒が持つ疑問や悩みを解決するためのアドバイスが全巻にわたって書かれている。比田井は「日本フルートクラブ」月報の中で何度も会員からの質問に答える記事を書いているが、まさにそれが活かされる結果となったのである。

4. おわりに

日本にフルート教師が少なかった戦後間もない時代に「日本フルートクラブ」を主宰していた比田井洵は、月報を通じて、フルート愛好家、独習者のために情報を提供していた。その活動とフルート教師としての経験から比田井は、日本版のフルート教則本が必要だと考えていた。1960年当時、日本でフルートを学ぶには2つの問題があった。一つ目は、フルート教師が少ないこと、二つ目は、外国から輸入する楽譜も高価であったことである。それらを解決するべく、比田井は『アルテ・フルート教則本』を単なる翻訳本とせず、フルート教師が近くにいなくても学ぶことができる解説を付けたものを、原書を輸入するよりも安価な教則本を出版したのである。

・本稿執筆にあたり、比田井裕氏には「日本フルートクラブ」の月報No.70～103までをご提供いただき、比田井洵氏が『アルテ・フルート教則本』執筆時に用いた元本や当時の配本と現在の出版物等について教えていただきました。また、教則本の一部を引用することについても許可をいただきました。

福永吉宏氏には山田忠男氏について教えていただき、山田忠男著『アルテ教則本』をご提供いただきました。

ご協力いただいた諸氏に感謝申し上げます。

参考文献

- Powell, Ardal. 2002. *The Flute*. New Haven and London : Yale University Press.
- Pierreuse, Bernard. 1982. *Flute Litterature*. Paris : Editions Jobert et Editions Musicales Transatlantiques.
- Brooke, Arthur. 1912. *The Modern Method for Boehm Flute*. Boston : Cundy-Bettoney.
- Toff, Nancy. 1996. *The Flute Book*. 2nd edition. New York : Oxford University Press. (1st. edition. 1985) .
- 田中知佐子 2015『大倉喜七郎とオークラウロ』大倉集古館編、東京：公益財団法人大倉文化財団・大倉集古館。
- 丹下聡子 2013『アルテスのフルート教本再考——導音の奏法に見る 19 世紀の美意識——』愛知県立芸術大学博士論文(第 12 号)。
- 2015「村松孝一研究(1) ベーム式フルート製作の始まり——明治期から昭和初期における国内の楽器情况——」愛知県立芸術大学紀要(45) pp.151-164。

・教則本

- Altès, Henry. 1880. *Célèbre Méthode Complète*. Paris : Millereau.
- . 1956. *Célèbre Méthode Complète*. Révisé par F. Caratgé. Paris: Alphonse Leduc (Reprint 2006) .
- Langey, Otto. 1889. *Tutor for the Flute*. New York: Carl Fischer.
- アルテス, H. 1978『アルテス・フルート奏法(第1巻)』植村泰一訳・解説、東京：シンフォニア。
- 1980『アルテス・フルート奏法(第2巻)』植村泰一訳・解説、東京：シンフォニア。
- 岡村雅雄 1958『フルートの学習書(初級用)』龍吟社。
- タファネル, P. ゴーベール, P. 2000『完全なフルート奏法(第1巻・第2巻)』吉田雅夫訳・解説、東京：シンフォニア。
- 比田井洵 1960『アルテ・フルート教則本(1)』東京：日本フルートクラブ。
- .1961『アルテ・フルート教則本(2)』東京：日本フルートクラブ。
- .1962『アルテ・フルート教則本(3)』東京：日本フルートクラブ。
- 山田忠男 1952『アルテ教則本』三和書房(非売品)。

・月報

- 『日本フルートクラブ』 1947 年～ 1961 年 11 月。

参考ホームページ

- "A Listing of All the Musicians of the Boston Symphony Orchestra"
- http://www.stokowski.org/Boston_Symphony_Musicians_List.htm#B (アクセス日 2016 年 11 月 5 日)。
- "IMSLP" http://imslp.org/wiki/Main_Page (アクセス日 2016 年 11 月 2 日)。
- "Harald-Genzmer-Stiftung" <http://genzmer-stiftung.de/> (アクセス日 2016 年 11 月 1 日)。
- "Robert Bigio flute pages" <http://www.robertbigio.com/caratge.htm> (アクセス日 2016 年 11 月 5 日)。
- 『日本フルートクラブ』 <http://www.jfc-pub.co.jp/index.htm> (アクセス日 2016 年 11 月 9 日)。
- 『ムラマツ・フルート』 <http://www.muramatsufute.com/> (アクセス日 2016 年 11 月 1 日)。

註

- ¹ 比田井自身が「アルテ」と呼んでいる。現在は「アルテス」で通用するため、比田井版のみ「アルテ」とする。また本研究では「教本」と「教則本」のふたつの呼称を記述しているが意味の区別はしていない。本研究ではフランスで 1880 年に出版された原書のことを「教本」、比田井版その他の日本語版を「教則本」とする。
- ² 19 世紀フランスのフルート奏者である。1868 年から 1893 年までは、パリ音楽院のフルート科教授を務めた。
- ³ 2016 年 1 月 28 日発行の第 1 巻は 40 刷である。
- ⁴ 『日本フルートクラブ』月報 1955 年 10 月号 No.49「笛を始めた頃」を参照し、本項の比田井の言葉はここから引用している。
- ⁵ 岡村雅雄(1892 - 1961)は、東京府立第四中学校を卒業した後、明治 41 年にアメリカに渡り、南カリフォルニア大学経済学部を卒業した。その後 5 年ほど新聞記者をつとめたが、大正 10(1921)年の暮に帰国した。フルートはロサンゼルス・フィルハーモニー交響楽団の首席フルート奏者であった Jay Plowe 氏に師事。ベーム式フルートを日本に普及させることに貢献した(丹下 2015 : 160)。
- ⁶ 平尾貴四男(1907 - 1953)は、フランスでフルートと作曲を学んだ。日本フルートクラブ発足時には自宅にて例会を催すなど

クラブの中心人物であった。月報には「貴四郎」と書かれている。

⁷ 吉田雅夫（1915 - 2003）は、NHK交響楽団首席フルート奏者、東京藝術大学教授を務めた。1966年に発足した「日本フルート協会」の初代会長であった。

⁸ 月報とともに配本されたものが、現在も「日本フルートクラブ出版」で販売されているものもある。

⁹ 原書はBoehm, Theobald. 1871. *Die Flöte und das Flötenspiel* で、岡村が使用した翻訳の元本はBoehm, Theobald. 1922. *The flute and flute-playing*. Translated by Dayton C. Miller. New York: Dover publications, inc. である。

¹⁰ 出版はされていないが、小又良一によって翻訳されたものが月報（130～135号）の付録として会員に配布されている。

¹¹ 出版当時は日本フルートクラブ京都支部の会員。日本フルート協会設立時の副会長であった。同志社大学名誉教授で人類学に関する著書のほか、音楽に関する著書もある。

¹² この教則本の原書について福永吉宏氏にインタビューした（2016年10月27,28日）。

¹³ 『日本フルートクラブ』月報1952年5月号No.9「アルテ教則本巻一の出版」参照。

¹⁴ 森敏信（生没年不明）。森は1938（昭和13）年に彼が編集した『フルート名曲集 第1集』を出版している。

¹⁵ 『オークラウロ協会』とは、1935年に大倉喜七郎の音楽方面に関する事務を行うKOK事務所の中の楽器改良研究会事務所のことで、翌年（1936年）、『オークラウロ協会』とされたものである（田中2015：9）。森敏信の教則本は田中の著書に写真が掲載されている（田中2015：19）。

¹⁶ ポール・タファネル Paul Taffanel（1844 - 1908）。

¹⁷ フィリップ・ゴーベール Phillipe Gaubert（1879 - 1941）。

¹⁸ たとえば、アンデルセンの *Virtuosity Studies op.60* は、1956年12月に配本されているが、1952年9月のカタログに掲載されているため省略している。

¹⁹ 「日本フルートクラブ出版」の比田井裕氏に確認していただいたところ、現在のJFCシリーズの（5）、（8）、（26）として現在も出版されていることがわかった。全35曲のものを15曲、12曲、8曲に分けている。

²⁰ アルテスの後を継いで教授となったタファネルは、教本を完成させる前にこの世を去ったが、タファネルの死後、彼の弟子であったゴーベールがそれを完成させて出版した（丹下2013：16）。

²¹ 『12の練習曲』は以下の2種類がある。*12 Etudes brillantes* (Salabert)、*12 Grandes Etudes* (Cundy Bettoney no.217)。後者が配本されたことが比田井裕氏によって確認された。

²² 『日本フルートクラブ』月報に作品番号の記載はなかったが『18の練習曲』は41番しかないし、配本には作品番号が書かれている。

²³ 『日本フルートクラブ』1952（昭和27）年8月号には「今般当フルートクラブと松尾ミュージックカンパニー（楽譜輸入商）との間に特別契約が成り立ち会員諸君に非常に安く楽譜の御取次出来る事になりました」と述べられている。注文の方法、米ドル・英シリング・佛フラン・独マルク等の換算率、現品到着までの日数などが記載されている。

²⁴ 1959（昭和34）年7・8月合併号「無題」を執筆した本多宏氏が比田井のレッスンで使用していたと記述している。

²⁵ これは1953（昭和28）年に配本として取り上げられている。

²⁶ ジュリオ・ブリッチャルディ Giulio Briccialdi, (1818 - 1881)。

²⁷ ジョアンヌ・ドンジョン Johannes Donjon (1839 - 1912)。

²⁸ 配本として取り上げたのは1959（昭和34）年3月のことであった。

²⁹ アーサー・ブルーク Arthur Brooke (1866 - 1950)。

³⁰ マクシミリアン・シュヴェートラー Maximilian Schwedler (1853—1940)。

³¹ F・ベネット・チャップマン F. Bennett Chapman (生没年不明)。『フルート・テクニク』は1936年に出版されている。

³² 『日本フルートクラブ』月報1960年2・3月合併号No.94「アルテの出版に際して」参照。

³³ 有限会社日本フルートクラブ出版は1973年に設立された。

³⁴ フェルノン・カラジェ Fernand Caratgé (1902 - 1991)。

³⁵ 「日本フルートクラブ出版」現代表取締役。

³⁶ カラジェ版を元本としていることは、すでに植村も指摘している（植村1978：4）。また、②も書中にメモ書きが存在することから出版の際の参考に使っていた可能性が高い。

³⁷ 「まえがき」では、フルートの構造、取扱、楽器の調整や修理の方法を掲載すると述べている。また、「原書から楽典をはぶき、近代的テクニック等必要なものを新たに加えた」ということも述べられている。